

2026(令和8)年 7月号

赤れんが博物館NEWS

発行：舞鶴市立赤れんが博物館



令和8年度第1回市民講座を開催 2026年5月9日(土)

講師

水野 信太郎さん

日本の近代化とれんが⑧ 鉦山とれんが

舞鶴市立赤れんが博物館 顧問
北翔大学名誉教授 工学博士

赤れんが博物館では、れんがの歴史を市民の皆さんと学ぶ「市民講座」を開講しています。令和8年度第1回は「鉦山とれんが」について水野信太郎先生にお話をいただきました。

水野先生は、前回の講座「監獄とれんが」の宿題であった英国式野焼き窯の形や、今和次郎先生の著作『農村家屋の改善』に登場する「材料 煉瓦」の章に触れた上で本題に入られました。



◀ 明治10年代に日本で採用されていた記録のあるれんが焼成方法「英国式野焼き窯」。焼き終えたら解体され、すべて出荷される。

日本には佐渡金山や石見銀山、足尾銅山など、江戸時代以前からの鉦山があり、江戸時代には銀の有力な輸出国でした。それが近代鉦山へと移行する中で、交通手段は水運から陸運（鉦山用蒸気機関車）へ、エネルギーは水車から石炭へと変化します。この産業革命は、工業生産だけでなく、人々の住まいや経済のすべてを変えていきました。

金銀銅鉄の採鉦や製鉄、炭鉦、石油、冶金（やきん）など、日本の鉦工業が近代化する過程において、れんがは不可欠な建築材料でした。幕末から明治にかけて日本の近代化が急速に進んだのは、優れた技術を持ち、異国で没する覚悟で来日したウォートルス兄弟をはじめとする、外国人技術者たちの功績があったからと言えるでしょう。

展示 ▶ 当館の鉦山のれんが関連

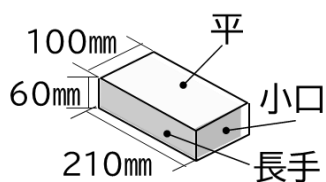


● 次回のご案内 10月31日(土) 日本の近代化とれんがシリーズ⑨「繊維とれんが」ぜひご参加ください

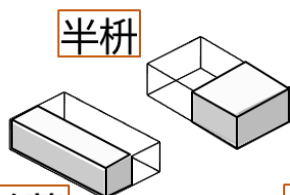
知っているようで知らない？ れんがの積み方①れんがの形・寸法

舞鶴市内のれんが建造物は、「赤れんが博物館はフランス積み、赤れんがパークのその他の赤れんが倉庫はイギリス積み」として市民の皆さんにおなじみかと思います。しかし、実際に壁を解体でもない限り、その内部までどう積まれているかを確認することはできません。今回から、復習を兼ねて「れんがの積み方」について詳しく見ていきましょう。

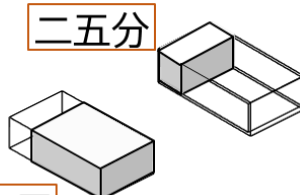
まず、れんがの積み方を考える上で外せないのが「形と寸法」です。私たちがよく目にする「210mm × 100mm × 60mm」の普通サイズ（通称：オナマ）のれんがだけでは、厚みのある壁を積むことはできません。どうしても隙間を埋めるための小さなれんがが必要になります。



普通れんが(オナマ)



羊羹



七五

最もよく使われる小サイズは、れんがを横に2つに切った「半枡（はんます）」と、縦に2つに切った「羊羹（ようかん）」です。



赤れんが博物館小企画展「ウズベキスタンとれんが」開催中(～8/31)

2026(令和8)年5月に、舞鶴市とウズベキスタン共和国のリシタン地区が姉妹都市提携を結んだことを記念し、当館では小企画展「ウズベキスタンとれんが」を開催しています。ウズベキスタンは、世界に2つしかない「二重内陸国」(国境を接する隣国もすべて海に面していない国)です。広大な砂漠や山岳地帯の中に、川沿いに豊かなオアシス都市が発展してきました。古くからシルクロードの要衝として栄え、9世紀から10世紀のイスラーム黄金時代を経て、14世紀のティムール朝時代には建築技術が頂点を極めました。

小企画展の大きな柱は、同国が誇る「イスラーム建築」と「日本人抑留者の歴史」の2つです。展示では、以下の貴重な建築物とそのれんがを紹介しています。

- アシュラトハナ廟(サマルカンド)：15世紀ティムール朝の女性たちの墓廟。かつては美しいタイルで装飾されていました。
- アブドゥラジズハン・メドレセ(ブハラ)：17世紀に建てられた神学校。正面の壮麗な装飾と、向かいの建物と対をなす「コーシュ」と呼ばれる構造が特徴です。
- ショカラダール・ボボ建築群(ヒバ)：17世紀から19世紀にかけて形成された聖墓を囲む建築群。
- 国立ナボイ劇場(タシケント)：第二次世界大戦後、ウズベキスタンへ送られた日本人抑留者が建築に従事した劇場です。彼らの誠実な仕事ぶりは今も現地で語り継がれています。1966年の大地震で街の多くが倒壊した際も、ナボイ劇場は無傷で残り、避難所として現地の人々を支えました。

ウズベキスタンから舞鶴へ帰還された方々と、現地との交流から生まれた絆が、今回の姉妹都市提携のきっかけとなりました。会場では、色鮮やかな民族衣装やリシタン陶器も展示し、現地の暮らしを身近に感じられる構成となっています。夏休み中も開催していますので、両国の絆を結んだ歴史と文化の魅力をぜひご覧ください。



▲「ウズベキスタンとれんが」展のれんがの展示

今月のれんが 舞鶴市立赤れんが博物館(旧舞鶴海軍兵器廠魚形水雷庫)

当館の建物が旧舞鶴海軍兵器廠魚形水雷庫として竣工したのは、1903(明治36)年7月30日のことでした。同年には、南側に鉄骨構造の「大砲庫」と「水雷庫」も建てられましたが、それぞれ昭和40年代後半と1992(平成4)年に解体されています。当時の解体跡からは、当館と同じ「貝塚煉瓦株式会社」の刻印があるれんがが見つっています。

実は、「魚形水雷庫」という名称であったのは、1911(明治44)年頃まででした。その後の名称や所管の激しい変遷を振り返ってみましょう。



▲「貝塚煉瓦株式会社」の刻印の入った当館のれんが

1911(同44)頃：第二水雷庫 → 1923(大正12)：装備庫 → 終戦時は掃海庫 → 1945(昭和20)：大蔵省所管、第二復員省舞鶴地方復員局需品部が管理 → 1946(同21)：復員庁第二復員局補給部が管理 → 1961(同36)頃：海上保安庁へ移管 → 1961(同36)：海上自衛隊へ移管、「舞鶴水雷調整所」に名称を変更 → 1970(同45)：大蔵省へ移管 → 1991(平成3)：土地建物を国から舞鶴市が取得 → 1993(同5)：改修工事終了、「赤れんが博物館」として開館

これほど多くの変遷を経ながらも舞鶴の地に残った、日本最古級の鉄骨れんが造の建物です。これからも末永く、大切に保存していきたいものです。

5月の市民講座で水野先生が紹介された、跡に何も残らないという英国式野焼き窯は、「仮設の野積み窯」のようなものでした。主な特徴は…①恒久的な窯(キルン)を作らず、焼きたい「素地れんが」(成形して乾燥させた、焼成前のれんが)を積み上げてそれ自体を窯の形にします。②火を入れて焼き終わったら、「窯」として積み上げていたれんがをすべて解体し製品として取り出すので、跡地には何も残りません。イギリスでは、18世紀頃までこの伝統的な方法でれんがが製造されていました。